

学位論文審査の結果の要旨

氏名	久保雄生
審査委員	主査 小林 一 (印) 副査 能美 誠 (印) 副査 内田 和義 (印) 副査 古塚 秀夫 (印) 副査 石田 章 (印)
題目	不在地主による農地の所有実態と不在地主問題の解消に向けた農地管理手法の解明 (Farmland ownership by absentee landowners and elucidation of the method regarding farmland use)
審査結果の要旨	
<p>中山間地域を含む農村地域では、高齢化や過疎化の進展により不在地主が増加しており、これが農地の利用調整を阻害し、耕作放棄地発生の一要因となっている。不在地主の存在状況や所有農地、耕作放棄地の規模等について、組織的な統計調査等による実態把握は全く行われておらず、調査方法さえ確立されていない状況に置かれていて、研究の取組も遅れた状態にある。</p> <p>そこで本研究では、アンケート調査等の手法を用いて独自に実態調査を実施し、不在地主による農地の所有実態と今後の活用意向、不在地主が所有する農地を管理する場合の課題を明らかにすることを目的とした。調査対象地域には、不在地主の発生とそれに伴う影響が他地域に比べて大きい山口県を取り上げている。そして、不在地主問題に対して農地の所有者である「不在地主」、不在地主の予備軍であると同時に地域農業の担い手にもなり得る「他出子弟」、農地管理者としての期待が高い「集落営農法人」を対象にして実態調査を実施し、収集したデータを数量化Ⅱ類の多変量解析法等の手法を用いて分析を行った。</p> <p>本研究は、実態把握が遅れたままになっている不在地主問題について、独自の実態調査に基づいて分析を行い有益な知見を導いている点で、学術的意義が大きい。とくに、詳細が不明な状況におかれてきた不在地主による農地の所有状況、農業者及び集落等との関係を明らかにし、不在地主が所有する農地を農地のまま存続させようとする意識を構成する要因を明らかにした点は、耕作放棄地の削減や農地の有効利用のための対策を不在地主との関わりで検討する際には大切な知見である。さらに、不在地主による農地の取得経緯の違いが、農地存続意識に影響を及ぼしていることを明確にした点は、既存研究が明らかにし得なかった成果である。また、不在地主問題の発生要因が、従来は専ら不在地主側から論じられてきていることに対し、集落住民側の取組にも焦点を当てて捉え直す必要性を指摘した点は、今後の対策の方向性を考えるうえで重要である。不在地主問題に関する調査方法が確立さ</p>	

れていない中で、独自のアンケート調査様式を用いて社会調査を実施しており、研究方法論においても独自性を確認することができる。

本学位論文は、序章と終章を含めて6章から構成されている。

序章では、研究の背景、研究目的、研究方法と分析対象地の選定理由を述べ、既往の研究レビューから、不在地主と他出子弟が地域農業及び集落運営において果たしうる役割やそのための仕組みが不明確であること、集落営農法人においては経営継承手法の組み立てが不十分であることを指摘し、本研究の意義を整理している。

第1章では、農林業センサスのデータを活用して農業の担い手及び農地利用の変遷について整理し、山口県における農業・農村構造の特徴、並びに不在地主に関わる特徴を明らかにしている。

第2章では、不在地主による農地の所有と集落住民の関係、農業者による継続的な耕作要因等を明らかにする目的で、下関市と岩国市で実施したアンケート調査結果によって分析を行っている。そして、農地取得の経緯が不在地主の農地存続意識に影響していること、不在地主では農地情報の継承意識が低いこと、集落住民と不在地主の間に存在する意思疎通や課題の共有化の弱さが両者の関係希薄化の一因になること等を明らかにしている。

第3章では、他出子弟と集落の間での関係の構築・強化の取組に基づく不在地主対策の可能性を明らかにする目的で、山口市徳地串地区でアンケート調査を実施して分析を行っている。そして、他出子弟と集落の関係を深めるには、他出子弟に対しては集落行事への運営支援や参画、農産物の定期購入支援等により、集落の活性化や農地保全に対する貢献姿勢が求められること、集落に対しては他出子弟に対する継続的な働きかけを組織として実施していくことの必要性を指摘している。

第4章では、集落営農法人の経営継承方式を組み立てることを目的として、後継者の法人への定着条件を整理し、後継者の代表就任意向の規定要因を明らかにしている。そして、後継者の確保・育成ステージに応じた課題と対応策について整理している。

終章では、本研究の要約を行い、不在地主問題への対応策について提案している。

以上のような本論文の特長に照らして、本研究が学位論文として十分な価値を備えていると判断する。